

研究テーマ	都心型広域集客施設がもたらす都心活性化効果に関する研究
研究者	平成 15 年度特別研究員 三阪 朋彦 (名古屋工業大学工学研究科博士後期課程)
研究目的	名古屋市の伏見・納屋橋地区に点在する広域集客施設に着目し、その施設来訪者の回遊行動特性を明らかにすることと、大須地区を対象に回遊行動のミクロ的分析を行い、都心全域における活性化への方策を探ることを目的とする。

研究成果概要

第 1 章 研究の背景と目的

名古屋の都心域は栄地区と名古屋駅地区を商業集積地区とする二極で構成され、この二つの地区をつなぐ広小路通という軸の存在により二核一軸といわれている。

本研究は、この二大商業集積にはさまれた地区を活性化することが都心全域の活性化につながるカギと考え、伏見・納屋橋地区に立地する広域集客施設(名古屋市美術館)に着目し、その施設来訪者の回遊行動特性を明らかにすることと、大須地区を対象に回遊行動のミクロ的分析を行い、都心活性化への方策を探っていくものである。

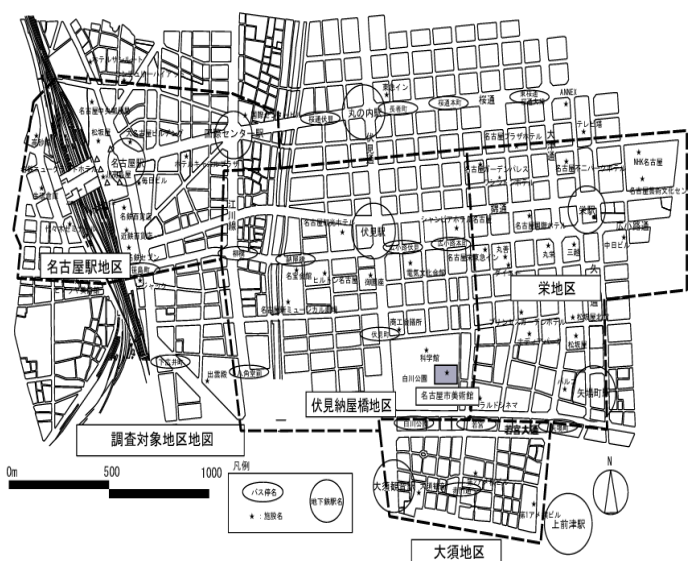


図 1 調査対象とした地区

第 2 章 アンケート調査の概要

(1) 名古屋市美術館調査

美術館調査は、2003 年 10 月 18 日(土)、11 月 1 日(土)、2 日(日)、8 日(土) 天候全日とも晴れ に名古屋市美術館の来訪者に対し企画展示室出口においてアンケート調査票を 1,825 部配布(回収 499 票、回収率 27.3%)し、来訪者が帰宅後その日 1 日の行動をアンケート用紙に記入し、後日返送してもらうという形式で行った。

(2) 大須地区調査

大須調査は、2003 年の 9 月の 13(土) 天候 晴れ・14 日(日) 天候 晴れ、の 2 日間に大須地区来訪者に対してアンケート調査票を 3000 部配布(回収 491 票、回収率 16.4%)し、来訪者が帰宅後その日 1 日の行動をアンケート用紙に記入し、後日返送してもらうという形式で行った。

第 3 章 名古屋市美術館来訪者の特徴

3 - 1 来訪者属性

展示内容ごとに美術館来訪者の属性に違いが出ることが明らかになった。特に年齢層・居住地で強く違いがみられる。

2000 年に筆者らが行った名古屋都心域広域調査結果と比べてみると、伏見納屋橋地区 2000 年来訪者（以下、「地区来訪者」と略す。）と美術館来訪者の属性の間にはさらに大きな違いがある。性別では既存来訪者の男性の比率が半数近くになっており、職業別では会社員がやはり半数近くになっている。これはこの地区がビジネス街であることを示唆するものであり、美術館来訪者の存在は明らかに異種の属性であると思われる。これが本研究で着目している都心活性化へのひとつのキーワードと考える。

表 1 美術館調査の来訪者属性別行動特性

		名古屋美術館調査							
		三好太郎展				フリーダ・カーロ展			
		人数	%	都心滞在時間	立寄り施設数	人数	%	都心滞在時間	立寄り施設数
全体		196	-	4.08	2.76	303	-	5.00	3.33
性別	男性	57	29.2%	3.37	1.43	95	31.5%	4.16	2.99
	女性	138	70.8%	4.20	2.97	207	68.5%	5.21	3.51
年齢	-19歳	2	1.0%	5.20	2.50	5	1.8%	3.56	3.00
	20代	18	9.2%	6.04	3.72	33	11.0%	5.56	3.66
	30代	15	7.7%	4.37	3.47	49	17.3%	5.28	3.78
	40代	44	22.6%	3.55	2.61	68	23.9%	4.57	3.65
	50代	66	33.8%	3.43	2.58	64	22.5%	4.38	3.08
	60歳以上	50	25.6%	3.44	2.50	65	22.9%	4.22	2.75
職業	会社員	35	18.0%	4.25	2.77	81	27.2%	5.05	3.51
	自営業	11	5.9%	2.21	2.09	14	4.7%	4.10	3.43
	公務員	38	20.2%	4.25	2.74	59	19.8%	5.23	3.17
	主婦	70	37.2%	3.57	2.87	76	25.5%	4.35	3.05
	学生	6	3.2%	5.42	4.50	15	5.0%	6.11	4.14
	その他	28	14.9%	3.48	2.54	53	17.8%	4.57	3.68
居住地	市内	102	52.6%	3.31	2.65	101	33.4%	4.42	3.20
	県内	72	37.1%	4.17	2.81	114	37.7%	4.44	3.36
	県外	20	10.3%	6.12	3.65	87	28.8%	4.27	3.55
同伴者数	0人	61	36.5%	4.06	2.54	144	47.7%	5.06	3.25
	1人	87	52.1%	4.00	3.80	133	44.0%	4.58	3.52
	2人	15	9.0%	4.15	3.07	13	4.3%	4.08	3.15
	3人以上	4	2.4%	4.15	1.80	12	4.0%	4.28	4.25

3 - 2 立寄り施設と滞在時間

美術館来訪者の都心域における平均立寄り施設数は全体では三好太郎展来訪者 2.76 ヶ所、フリーダ・カーロ展来訪者 3.34 ヶ所と地区来訪者 3.48 ヶ所に比べ若干減少している。しかし、滞在時間を立寄り施設数で割り込んだ施設滞在時間は美術館来訪者が約 1.5 時間/ヶ所に対して既存来訪者は 1.31 時間/ヶ所と施設 1 ヶ所あたりの滞在時間が長くなっていることがわかる。これは、美術館滞在時間の長さには寄与していると予想されやすいが、実際には美術館の平均滞在時間は 1.32 時間と施設種別平均滞在時間を下回っているため、要因は同伴者種によるものと考えられる。女性は男性・女性と、男性は女性と訪れるケースが多く、都心での過ごす時間の多くを恋人や友人との語らいに費やすものと推測できる。白川公園についての意見でも「カフェ」「芝生」「ベンチ」といったくつろぎ空間の要望が多かったのもこの結果を裏付けている。

3 - 3 鑑賞前後の施設立寄りに関する分析

ここでは美術館来訪者の鑑賞前後の施設立寄りに着目してその構成の分析をおこなった。(図 2)

この図を見ると、両来訪者とも鑑賞の前行動においては自宅とのつながりが非常に強いことがわかる。鑑賞後行動においては自宅よりも飲食・店舗とのつながりが強くなる。この傾向は劇場来訪者において同様の行動を見ることが出来る。美術館来訪者の行動で他と異なる点は美術館相互移動である。本美術館からまたは、他美術館よりいわゆる“はしご”をする来訪者が多く見られ、比較的短時間で複数の美術館を回る行動は大きな特徴といえる。

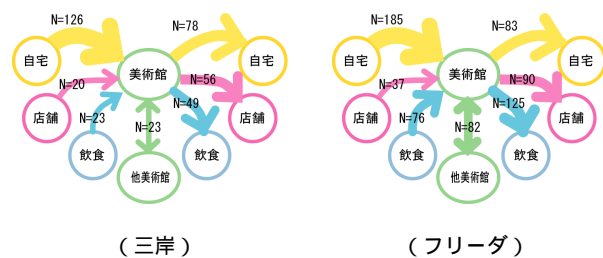


図 2 美術館来訪者の鑑賞前後行動シークエンス

3 - 4 美術館来訪者の歩行密度分布

美術館来訪者の周辺地下鉄駅から美術館までの歩行経路を歩行密度分布図にて示す。(図 3)

栄地区と伏見・納屋橋地区をつなぐ東西の通のうちほとんどで中間に U ターンを示唆する“くびれ”を見ることが出来る。これを解消し歩行者を回遊させることが都

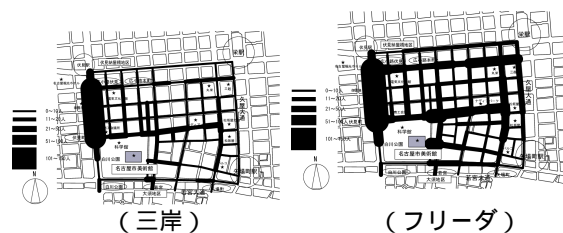


図 3 美術館来訪者歩行密度

心活性化の一つの手立てとして考えられる。

さらに、都心来訪の交通手段別を見ると、20～30%の人が車ででの来訪となっている。車ででの来訪者は都心域での行動は、他交通手段利用者 비해、三岸展来訪者で立寄り施設数・滞在時間とも約 20%、フリーダ展来訪者で約 10%の減少を見る。この点も地図中の“くびれ”の原因になっていると考えられる。



図4 調査対象とした大須地区

第4章 大須地区来訪者の特徴

4-1 来訪者属性

来訪者の構成は、平成 10 年に筆者らが行った大須地区調査(以下、「H10 調査」と略す。)と比べて、女性と 40 代の増加が著しい。人数をみると、2 人(半数以上が夫婦・恋人)が最多(45%)で、次いで 30 代以上男性が目立つ 1 人(30%)、3 人以上(4 分の 3 が家族)(20%)の構成となった。交通手段をみると、地下鉄・バスが最多(43%)であるが、車の割合が 40%と 6 ポイント増加している。これは昨年南大津通沿いに開設された大規模駐車施設(万松寺駐車場(875 台))の影響が考えられる。また、車の利用者は家族、夫婦・恋人など 2 人以上の比率が高い。

表2 大須地区調査の来訪者属性別行動特性

	N	平均値		
		歩行距離 (km)	滞在時間 (分)	立寄り施設数 (ヶ所)
平成15年	491	1.15	148	5.0
性別				
男性	231 (48%)	1.18	155	5.1
女性	253 (52%)	1.13	142	4.9
年齢層				
29歳以下	120 (25%)	1.15	159	5.2
30～49歳	215 (44%)	1.19	149	5.3
50歳以上	152 (31%)	1.09	138	4.4
住所				
名古屋市内	233 (48%)	1.11	141	4.8
愛知県内	155 (32%)	1.19	151	5.0
愛知県外	94 (20%)	1.21	160	5.4
来訪頻度				
月に1回以上来る	248 (52%)	1.13	147	5.1
月に1回も来ない	228 (48%)	1.19	150	4.9
人数				
1人	142 (30%)	1.05	143	4.5
2人	214 (45%)	1.24	153	5.5
3人以上	121 (25%)	** 1.14	147	** 4.9
同伴者種				
友達	81 (17%)	1.22	162	6.1
家族・親類	133 (27%)	1.16	151	5.0
夫婦・恋人	124 (25%)	1.24	144	5.1
同伴者なし	153 (31%)	* 1.05	143	** 4.5
交通手段				
地下鉄・バス	211 (43%)	1.17	165	4.9
車	192 (40%)	1.19	145	5.6
自転車・徒歩	72 (15%)	1.05	103	3.7
その他	11 (2%)	0.89	** 150	** 4.8
平成10年	153	1.34	140	5.4
性別				
男性	96 (64%)	1.34	143	5.6
女性	55 (36%)	1.33	* 173	5.5
年齢層				
29歳以下	46 (30%)	1.41	167	6.4
30～49歳	58 (38%)	1.38	153	5.9
50歳以上	49 (32%)	1.22	150	** 4.3

(*10%有意で差 **5%有意で差)

4-2 立寄り施設と滞在時間

H10 調査と比べると、全体的に歩行距離(1.34 km 1.15 km)と立寄り施設数(5.4 ヶ所 5.0 ヶ所)は減少したが、滞在時間(140 分 148 分)は増加している。立寄り施設あたりの滞在時間が長くなった背景には、後述の飲食店立寄りの影響が考えられる。また、人数に着目すると、2 人での区内行動が活発で、ついで、3 人以上、1 人での行動は不活発な傾向にある。交通手段別にみると、車ででの来訪者は地下鉄・バスでの来訪者に比べて、滞在時間は短い立寄り施設数は多い。その主な原因は、駐車料金の存在にあると考えられる。

表3 属性別立寄り施設種順位 (1人あたりの立寄り施設数：ヶ所)

		1位	2位	3位
平成15年	全体	電化製品(1.05)	飲食(0.84)	衣料品(0.64)
性別	男性	電化製品(1.78)	飲食(0.80)	中古品(0.50)
	女性	衣料品(0.93)	飲食(0.86)	中古品(0.63)
年齢層	29歳以下	衣料品(1.13)	電化製品(1.10)	飲食(0.89)
	30～49歳	電化製品(1.23)	飲食(0.88)	中古品(0.63)
	50歳以上	電化製品(0.73)	飲食(0.72)	中古品(0.60)
人数	1人	電化製品(1.53)	飲食(0.58)	中古品(0.54)
	2人	飲食(0.96)	電化製品(0.93)	衣料品(0.93)
	3人以上	飲食(0.98)	電化製品(0.71)	雑貨(0.63)
同伴者種	友達	衣料品(1.50)	電化製品(1.21)	飲食(0.84)
	家族	飲食(1.04)	雑貨(0.68)	電化製品(0.61)
	夫婦・恋人	飲食(0.95)	電化製品(0.83)	中古品(0.69)
交通手段	地下鉄・バス	電化製品(1.05)	飲食(0.88)	衣料品(0.72)
	車	電化製品(1.25)	飲食(0.88)	衣料品(0.66)
	自転車・徒歩	雑貨(0.71)	飲食(0.62)	その他(0.49)
平成10年	全体	電化製品(2.11)	衣料品(0.59)	飲食(0.59)
性別	男	電化製品(2.79)	飲食(0.48)	中古品(0.44)
	女	衣料品(1.14)	電化製品(0.89)	飲食(0.79)
年齢層	29歳以下	電化製品(2.83)	衣料品(0.98)	日用雑貨(0.76)
	30～49歳	電化製品(2.53)	中古品(0.63)	飲食(0.58)
	50歳以上	電化製品(0.96)	飲食(0.74)	衣料品(0.56)

飲食店に立ち寄っている。交通手段別では、地下鉄・バス、車共に電化製品が多いが、車の方が1人あたりの施設数が多い。

4 - 3 大須地区来訪者の歩行密度分布

大須地区来訪者の属性別の歩行密度分布を図5に示す。属性に関らず、新天地通と万松寺通は5割前後の人々が歩行しており、特に万松寺通は全ての層にとって、地区のメインストリートの地位にある。性別についてみると、前回と同様に、男性は電化製品店が多い赤門通、新天地通を、女性は衣料品店が多い万松寺、東仁王門通を歩く人が多い(図5-a,b)。

交通手段についてみると、車による来訪者の歩行密度分布は特徴的である。開設された駐車施設の影響により、新天地通の歩行が多い。また、この通りは赤門通、大須本通、万松寺通と周回路を形成している(図5-c)。周回の狙いは万松寺通、大須本通にある飲食店にあると考えられる。これに対し、地下鉄・バスによる来訪者は、大須観音通 万松寺通を東西に往復する傾向がある(図5-d)。

人数についてみると、いずれの層も万松寺通西側での歩行が多い。1人の場合は、電化製品店の立ち並ぶ新天地通や赤門通が多い(図5-e)。2人の場合は、新天地通と並んで万松寺通や東仁王門通が多くなる(図5-f)。3人以上の場合は、万松寺通に加え大須観音通と仁王門通が多いのが特徴である(図5-g)。また、人数が多いほど大須観音付近の歩行が増える傾向にある。

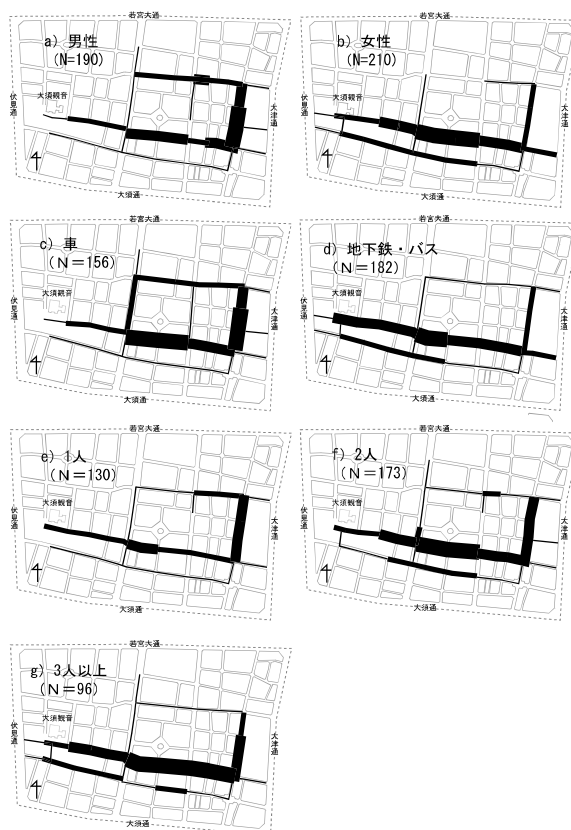


図5 属性別歩行密度分布

第5章 結論

これらのことから都心型集客施設来訪者および既存来訪者の特性を調査・分析することは、異種来訪者を地区に招き入れるという観点において「元気都市なごや」を実現する手法のひとつとして非常に重要であるといえる。

また、来訪者の都心域における回遊行動分析結果は調査対象施設・地区の性格をあらわすことができ、各施設・地区ごとのマネジメント方針を検討する指標として活用でき、有効に都心活性化の手立てを講じることができると考える。

今回のケースでは、美術館調査においては駅からの歩行動線の整備・他美術館との交流という方策を行うことにより、より活発な回遊行動が見込まれ、大須調査においては「にぎわい」をもたらすためには商店街ごとに独自の方策をとることが必要であることが調査結果より明らかになった。今後もさらに施設調査を積み重ねていくことで、より効率的な活性化策を講じることができると思われる。